

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業—CIS 活動報告(インド)

広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業運営委員会 委員 勝又 美穂子
接合科学研究所 特任准教授

2014年9月14日～9月28日の期間で本年度5カ国目のCISをインド・グジャラート州で実施しました。大阪大学外国語学部ヒンディー語専攻から2名、工学研究科から2名、インド工科大学ハイデラバード校工学部から2名、人文学部から2名の学生が参加しました。デリーから飛行機で西へ2時間のバドーダラへ移動、更にバスで2時間のバルーチという町の宿泊先にて、日系企業理念、製造業の取り組み、コミュニケーションの基礎などについて事前研修を実施後、休日を除く9月18日～9月24日の5日間はISGEC/Hitachi Zosen（日立造船インド合弁企業）にて実習を行いました。学生は「多文化、多言語環境におけるコミュニケーションの問題」という課題の下、ISGEC/HITZの各幹部から合併前と合併後の変化、日本人とインド人が一緒に仕事をする事、マネジメントとは何か、インドが抱える問題等について個人の経験を元にした講義を受け、また各部門の詳細な業務、部門間の業務の流れについても学びました。更に、各部門責任者へのインタビュー、製造現場での溶接実習や作業員へのインタビュー

も経験し、現場から経営に至るまで異なる立場の社員の考え、業務について肌で学びました。9月26日にISGEC/HITZで開催された最終報告会にはISGEC/HITZのSanjay社長、Rai執行責任者、竹中取締役、Ranjan 人事部長他2名、IITHからはスカイプにて2名の教員が、またIITHへ支援を行っているJICAから1名、大阪大学言語文化研究科ヒンディー語専攻高橋教授らが参加しました。Sayjay社長やRai執行責任者からは初めて気づく社内の問題点もあり大変参考になった、短い期間でここまで調査し、提案をまとめ上げたことに驚いているとのコメントがありました。また、竹中取締役からは、仕事を行う上で最も重要なことは人間関係であり、ビジネスの成功、技術の向上などはその後に自然について来るものであるため、今回築いた日本人、インド人の学生との関係を末永く保って欲しいとの貴重なコメントを頂戴し、CIS活動の締めくくりとなりました。インド僻地での滞在でしたが、企業からの温かいご支援により皆体調を崩すこともなく最後までやり遂げました。

